

上方文藝研究

第16号

- 宗因独吟「関は名のみ」百韻注釈 深沢了子 (1)
 深沢眞二
- 「おもくさ」は「そばかす」にあらず
 —『好色一代男』の注釈を巡って— 新稲法子 (39)
- 上方論争史を考えるために —『葉選』『非葉選』を中心に— 福田安典 (52)
- 鉄格子波丸『葦牙草紙』の構想
 —「浪花貨殖伝」という別題に関して— 野澤真樹 (64)
- 菅原洞斎の古書画展観会 有澤知世 (77)
- 香川景柄(黄中)から景樹へ —移行期の検討— 浅田 徹 (89)
- 連載 上方文藝への招待 (8)
 デジタル発 和書の旅
 ひるがえる和歌たち —扇と翻訳で古都に遊ぶ— 神谷勝広 (117)

上方文藝研究会

2019年6月

「おもくさ」は「そばかす」にあらず

—『好色一代男』の注釈を巡って—

新 稲 法 子

はじめに

井原西鶴『好色一代男』巻二「女はおもはくの外のくだりに

小づくりなる女。年の比は片手を。四度計かぞふるころをひ、
目のうちすすしく。おもくさ、しげく見えて。どこともなふ、
このもし。(一)

とある「おもくさ」について、現在の注釈書は一律に「そばかす」と解釈している。

また、この「おもくさ」について論じたものに福田安典「『好色一代男』「おもくさ」考—忍頂寺務の指摘をてがかりに—」(2)がある。福田は「おもくさ」が「そばかす」であることを踏まえた上で、「おもくさ」の「おもくさ」というイメージにつ

いて、雑誌『彗星』「西鶴対問」に掲載された忍頂寺務の投稿を手がかりに、人相書にまで範囲を広げて論じている。

本稿はこれらを再検討し、「おもくさ」はほんとうに「そばかす」なのか、「おもくさ」とはいつたい何なのかについて明らかにすることを目的とする。

従来の注釈とその問題点

これまでの『好色一代男』の注釈においては、昭和二十八年「定本西鶴全集」中央公論社、昭和三十二年「日本古典文学大系47西鶴集上」岩波書店、昭和四十六年「日本古典文学全集38井原西鶴集」小学館、昭和四十九年「対訳西鶴全集1」明治書院、昭和五十五年『好色一代男全注釈』角川書店、昭和五十七年「新潮日本古典集成好色一代男」新潮社のすべてが、前掲の「おもくさ」を「そばかす」としている。

『西鶴論議』ではこの部分について、三田村鳶魚が「おもくさしげく」はじやんこ面づらでせう。」と言ったのに対し、山崎樂堂が「これはなにかい、方の意味ぢやありませんか。「どこともなふこのもし」といふんだから……。」と言ひ、「睫毛か眉毛」ということになっている。さすがに三田村は「さういふ言葉がありますか。」と確認しているのだが、山崎は「それは知りませんが、多分そんな意味だらうと思ふのです。オモクサを「面草」と解し、面に生える草といふのを眉毛と取るので……。」と返答している。柴田宵曲もこの結論に納得したのか、附記で体毛を「草」と表現する例として「腋毛」「腋草」を記してこの話題は終わっている(3)。

これは「くさ」が肌の荒れた状態を示す語であるにも関わらず、文字通り草のように生える意味に取った珍妙な解釈といえよう。

はたして『彗星』第二年第十一号十一月号の「西鶴対問」には、この「睫毛か眉毛」を疑問とする投稿が寄せられた。藤井紫影と岡康雄が「おもくさ」は「そばかす」であると主張したのである。ちなみにこのとき忍頂寺務は「モミアゲ」だとしている(4)。更に次号、第二年第十二号十二月号の「西鶴対問」にも、佐藤鶴吉による「そばかす」説が掲載された。

『好色一代男全注釈』の前田金五郎は、「おもくさ」を「そばかす」とするに当たつて

【論議】藤井氏が「思ひオモクサ思はレニキビ」といふ諺ありと示され、同じく佐藤鶴吉氏が「そばかす」を美人の相とする今日の俗説」と説かれた事項は、そのまま時に適用しても差し支えないようである(5)。

と記しており、これら「西鶴対問」の投稿が現在の「おもくさ」「そばかす」説の元になっていることがわかる。

しかし、これらの投稿によつて「おもくさ」を「そばかす」とするのは無理があるのではないだろうか。諸家の投稿を今一度見直してみよう。

まず、藤井紫影の投稿であるが、

そばかすの事で、思ひオモクサ思はレニキビといふ諺あり。(6)

と、「思ひオモクサ思はレニキビ」という諺を添えている。しかしこの諺は、「おもくさ」が「そばかす」だという根拠として成立しない。

次に岡康雄の投稿は、

四〇頁「面草しげく」の件、関西、私の郷里の広嶋等では「そばかす」のことを「おもくさ」といひます。(7)

と西鶴から時間的地理的に遠く離れた当時の広島方言を「そばかす」の根拠にしている。

佐藤鶴吉の投稿はやや長いが、同じく全文を引用しよう。

三、おもくさ(二巻、四〇頁)についても、私は前から疑問をもつてゐる。大日本国語辞典には

おもくさ。古語。面に生ずるかさ。にきびの類。字鏡集

「奸オモクサシ」

としてある。私は、あそこの文の前後から考へて、諸家の御説もさることながら、どうも従ひかねる。そこで、東京で今言つてゐるそばかす、則ち雀斑といふものではあるまいかと思ふ。これについて、某女流教育家が、「そばかす」のことを「おもくさ」と用ひてゐたのを聞いたことを憶ひ出す。その人は長州の方であるので、その後他の長州萩の人に質すと、確に「そばかす」のことを、萩地方では「おもくさ」といふさうである。更に、あそこの文章に立ちかへつて考へると「どこともなふこのもし」といふのであるから、「そばかす」を美人の相とする今日の俗説に拠れば、「そばかす」説でよささうに思ふが、どうであらうか。それも、あまり大きく濃いのが、沢山では美人らしくもあるまいが、小粒のやつが、うすくある肌合の女には、「このもし」のが今日も多いやうに私は見てゐるのだが。(8)

佐藤は「東京で今言つてゐるそばかす、則ち雀斑といふものではあるまいかと思ふ」「そばかす」のことを、萩地方では「おもくさ」といふさうである」と、「おもくさ」が「そばかす」である根拠として、西鶴の時代ではなく当時の、しかも大坂ではなく東京や萩地方の方言を取り上げている。

さらに「そばかす」説を踏まえた前掲の福田論文においても

例えば筆者の生育した河内では昭和五十年代頃には「そばかす」のある女性は「気が多い」という俗説があった。ネットで検索すれば同様の発言も見つかる「今日の俗説」である。

と、「昭和五十年代頃」の「河内」やインターネット上の「今日の俗説」によつて「おもくさ」のある女性の印象について論じている。

これらに共通するのは、その根拠が昭和二年当時、また昭和五十年代から現代の、広島・東京・萩・河内という、西鶴と遠く離れた時代と場所の例であることだ。

先に見たように、佐藤鶴吉は「大日本国語辞典には おもくさ。古語。面に生ずるかさ。にきびの類。字鏡集「奸オモクサシ」といつたんは「面に生ずるかさ。にきびの類」という辞書の説明を引用しながら、どうしたことか「東京で今言つてゐるそばかす、則ち雀斑といふものではあるまいかと思ふ」と飛躍し、長州の言葉、「そばかす」を美人の相とする今日の俗説」を取り上げている。

いったいなぜ「大日本国語辞典」の「面に生ずるかさ。にきびの類」に「どうも従ひかねる」のか。なぜ「好色一代男」が書かれた時代の大阪ではなく、「東京で今言つてゐる」「今日の俗説」に飛躍して「おもくさ」が「そばかす」になるのか。その理由について佐藤は言及していない。

これらの投稿と福田論文が、自分たちと同時代の俗説を用いて「おもくさ」を「そばかす」だとするのは、「そばかす」のある女性の持つ、美人や多情というイメージに基づいているように思われる。それは、おそらく「西鶴輪講」で睫毛や眉毛に迷走してしまつた原因、この文において、

小づくりなる女。年の比は片手を。四度計かぞふるころをひ、目のうちすゞしく。おもくさ、しげく見えて。どこともなふ、このもし。

と「おもくさ、しげく見えて」が「どこともなふ、このもし」にかかっていることが影響しているのではないだろうか。

しかし、そもそもこの「小づくりなる女」が「どこともなふ、このもし」の要素は、「年の比は片手を。四度計かぞふるころをひ」目のうちすゞしく「おもくさ、しげく見えて」がかかっている、「おもくさ」のみが「このもし」の決定的な理由ではない。この女性の人相を検討するには、「目のうちすゞしく」も「おもくさしげく」と同様に取り上げるべきであろう。

「年の比は片手を、四度計かぞふるころをひ」すなわち数え年で二十歳前後であるから、「おもくさ」は佐藤鶴吉が引用した『大日本国語辞典』の「面に生ずるかさ。にきびの類」で何の問題もないと考えられる。「おもくさ」はここでは若さの象徴であり、完璧な美しさではないことで、かえってこの女性に親しみやすいイメージを与えているのである。

およそ古典文学の注釈に当たっては、言うまでもないことだが現代人である我々の語感とはひとまず置いて、当時の例に当たらねばならない。『好色一代男』の書かれた近世、好色な女性の相は、縮れた髪、口が小さい、足の指が反つているというものであった。また、「そばかす」だけでなく、「にきび」や「ほくろ」「あざ」は、女性的美を損なう欠点として描かれている。

これらはここでわざわざ例を挙げるまでもない当時の美意識だが、それに対して、近世に、諸家の言うように「そばかす」を美人や多情な女性の特徴として用いた例を寡聞にして筆者は知らない。「おもくさ」が「そばかす」であり、美人や多情な女性の相だとするならば、西鶴の生きた時代の大坂の文献に基づいて、そのことを

示すべきである。

これだけ注釈があつて論文も数多い『好色一代男』のような作品について、西鶴の生きた時代と場所から遠く離れた根拠による「そばかす」説が、現在に至るまで受け継がれているのは驚きである。

そもそもなぜ「面に生ずるかさ。にきびの類」で文脈上おかしくない「おもくさ」を、「そばかす」にしなければならぬのであるうか。「そばかす」について佐藤は「小粒のやつが、うすくある肌合の女には、「このもしい」のが今日も多いやうに私は見てゐる」とその魅力を説いている。「そばかす」の多い女性が美人であつたり多情であつたりするという昭和時代の俗説は、男性研究者を迷走させる程、魅力的なものだったのであるうか。

広義のおもくさと狭義のにきび

「おもくさ」が記載されている辞書類としては、『日本国語大辞典』によると『字鏡集』の他に『名語記』九に

おもくさ 如何。面草也。但 おもは 面也(9)

とある。ここでは「おも」の説明だけで「くさ」が何か記されていないため、「おもくさ」が何かはわからない。

「おもくさ」について具体的に記した辞書としては、『和英語林集成』が挙げられる。初版が刊行されたのは慶応三年だが、「そばかす」説が根拠とする昭和二年や昭和五十年代よりは西鶴の生きた時代に近いだろう。「にきび」と「おもくさ」の項を挙げよう。

nikihi 面皰 pimples on the face, acne

omokusa 面瘡 an eruption on the face (11)

これによると「にきび」は、皮膚病の中でもはつきりと独立した疾患 'acne' つまり面皰として理解されていたようである。「おもくさ」については an eruption on the face、則ち顔にできる吹き出物と明確に記されている。

ちなみに、『和英語林集成』より溯つて『日葡辞書』では「おもくさ」は、『Vomocusa. Sardas do rosto』とある (rostoは顔で、Sardasはしみや雀斑)。「和英語林集成」は序で『日葡辞書』を参照したと記しているが、「おもくさ」の場合、eruptionとSardasとはかなりニュアンスの異なる語である。

erupt という動詞は火山が噴火したり間歇泉が噴出したり、怒りなどの感情が爆発したりするのを表す。つまり溜まったエネルギーが一気に外に出るイメージである。狭義の面皰に対して広く皮膚に出来るもの、つまり、吹き出物を表すといえよう。この説明は、佐藤鶴吉の引用した『大日本国語辞典』に「面に生ずるかさ。にきびの類」とあるのと矛盾しない。

「おもくさ」が面皰ではない例としては、福田論文にも引用されている『近世説美少年録』二一—四の次のくんだり、

持病の逆上によりて、去歳の春より秋までも大く顔瘡を患思はば (11)

が挙げられる。『近世説美少年録』は文政十二年の刊行だが、西鶴も作者の一人である『阿蘭陀丸二番船』にも同様の例がある。

閩よりは外へ出たる月もなし

姿やつれておも草の色 大坂保直 (12)

つまり、「おもくさ」は、こういつた発疹を伴う病気によるものや面皰をも含む広義の語、吹き出物に当たる語であり、eruption という語からも、盛り上がった発疹で雀斑ではないと考えられる。従つて、『好色一代男』の「おもくさしげく」は、「吹き出物がたくさん出ていて」ということになるだろう。そしてその吹き出物は、「年の比は片手を。四度計かぞふるころをひ」という文脈から面皰であると解釈されよう。

「おもくさ」と女郎花

次に、「おもくさ」が「そばかす」ではなく吹き出物であることを、「おもくさ」と女郎花の関係から示したい。

福田論文で指摘されているように、俳諧においては「おもくさ」が女郎花との取り合わせで詠まれることがあった。引用されている句をもう一度検討してみよう。まず

人の好くおもくさ顔や女郎花 (二口真似草) 三 (13)

であるが、これは「おもくさ」があるのは完璧な美しさでない分、かえって親しみやすさを感じさせることをいうのであろう。一代男の「どこともなふこのもし」の表現するところも、これと同じだと考えられる。次に、

世心や露おもくさの女郎花（時勢粧）二（14）

は露が「重い」のと「おもくさ」をかけている。そもそも露は和歌において女郎花に限らず様々な植物とともに詠まれているが、

粟ほどな露やおもくさ女郎花 堺善正（続境海集）（15）

のように、その露の大きさを粟ほどとしているのは、女郎花に限られる。これは、その花の粟のような形状に基づくと考えられる。

このように粟や露の縁語になつていくことから、「おもくさ」が吹き出物であることが窺える。何故なら、皮膚が細かく隆起する様子を想起させるからである。

対して雀卵斑は色素斑の一種であつて、皮膚はほとんど隆起しない。名前の由来であるソバ殻も他の植物の実の殻と比較して平たい。もし「おもくさ」が「そばかす」であつたなら、女郎花のような粟状の花を連想することは困難であらう。

さて、俳諧だけではなく、『女重宝記』の「大和詞」にも

一、粟は、をみなへし。（16）

とあつて、女郎花は粟の女房言葉になつている。『俳諧是天道』に

頬がひに粟のめし粒三三二二

あこに色鳥飼てたまはれ（17）

とあるように、粟飯は日常的なものであつて、女郎花から黄色い粟はたやすく想像されるものであつた。

この粟を「にきび」、女性らしく控えめな、小さめの「にきび」であることを、はっきりと記した例がある。『古今夷曲集』巻第三 秋哥の次の一首である。

百首歌の中に、女郎花

入安

秋の野に露おもくさの女郎花色はにきびか粟のむせるか（18）

秋の野に重たげに露が降りている、「おもくさ」のような女郎花の花であるが、その花の様子は例えるなら「にきび」であろうか、それとも黍か、粟を蒸したものであろうか、露が「重い」と「おもくさ」、「にきび」に「きび」を掛けているこの狂歌は、女郎花を詠んで、「にきび」と「きび」や「粟」の「むせる」ものを挙げているのである。

これまで見てきたように、粟はしばしば女郎花に例えられるが、ここではそれと「にきび」が並べられている。すなわち、「おもくさ」とは、蒸した黍や粟のように細かな「にきび」、つまり吹き出物であることを、この狂歌ははっきりと示しているのである。

ちなみに新日本古典文学大系の注には「露重く」に、「おもくさ」

（そばかす。若い女の好ましい顔貌の二）を掛ける」（19）とある。他でもない「にきび」を詠み込んでいるのに、「おもくさ」を「そばかす」と解釈しているのは、『好色一代男』の注釈の影響かもしれない。

しかし、この一首は、「おもくさ」が「そばかす」ではなく「にきび」であるからこそ成立する。

露↓重（おも）し

おもくさ=にきび

きび（黍）・粟

「にきび」に「きび（黍）」という語が含まれていて、その縁で「粟」に繋げるところに技巧がある。「おもくさ」が「そばかす」に置き換わってしまうと、上の句が下の句に繋がらない。

露、「おもくさ」、粟と、女郎花の卑俗な縁語が淀むところなく繋がっていくのがこの狂歌の眼目であり、それが成立するためには「おもくさ」は「にきび」でなければならない。

『古今夷曲集』の刊年は寛文六年、『好色一代男』が刊行された天和二年と十六年しか違わない。

新日本古典文学大系の校注によると、「同時代の作者は編者行風の住む大坂周辺の商人が中心で、俳諧愛好者層と多く重なる」、またこの歌の作者入安について「作者之目録」の注で「中院通勝批点」「入安百首」の作者。伝不詳。「後撰夷曲集」「銀葉夷曲集」では堺の人とする。慶長頃の人」という(20)。

『古今夷曲集』編者の生白堂行風は浅倉氏、字は懐中。和歌、俳諧、特に狂歌をよくしたが、「高津汚道子」と自署していることから窺

われるように、大坂、高津の人である。

おみなえしの狂歌を詠んだ入安は堺の人である可能性が高いが、昭和五十年代の河内、いわんや昭和初期の東京などとは比較にならないくらい西鶴に近く、高津の人である行風の選を経たのであるから、その狂歌は当時の大坂の言葉を反映していると思なしてよいであらう。

「そばかす」説の根拠は「西鶴対問」の投稿に溯る昭和二年時点の東京・広島・萩の例であるが、ここに挙げた『古今夷曲集』の用例は寛文六年の大坂のものである。西鶴が『好色一代男』を書いた時代の大坂で、「おもくさ」が粟のような「にきび」、則ち吹き出物を指す言葉であったということは、入安のこの狂歌から、動かしようのない事実である。

「おもくさ」と「にきび」

「おもくさ」が「にきび」、それも粟のように細かなもので、現在の我々が吹き出物と呼んでいるものに相当することは明らかであるが、ここでは「おもくさ」が面皰とどういう関係なのかについて、今少し述べておこう。

寛政四年刊の『万用重宝記』は

顔の面皰おしくま面瘡おしくま出来物の類の葉(21)

と面皰と「おもくさ」が代表的な顔のできものとして取り上げられている。

西鶴の時代から遠く離れてしまいが、「面砲」と「おもくさ」を並列する型に、「西鶴対問」で藤井紫影がいう「思ひオモクサ思はれニキビ」がある。藤井の投稿が掲載された「彗星」十一号は昭和二年刊行だが、昭和八年に国書刊行会から出版された中野吉平「俚語大辞典」には次の項がある。

【思ひ面瘡思はれ砲】先方より思はるれば顔に砲を生じ、又此方より思へば瘡を生ずと。(22)

さらに刊行年は昭和三十九年まで下ってしまいが、「思ひ面瘡思はれ砲」について、野口七之輔『故事ことわざ辞典』では「人をおもたり思われたりすれば、にきびが出るもの。若い男女を冷やかした言葉。」(23)と、「面瘡」と「面砲」を共に「にきび」としている。

【譬喩尽】には

面砲男おもひおとこに面瘡女房おもひさによは(24)

と男性に面砲、女性に「おもくさ」を配した諺がある。

この「〇〇男に〇〇女」という型には、「譬喩尽」では「吾妻男あづまおとこに京女みやこめ薦いせせん」「尾張男おわりおとこに伊勢女いせをんな」があつて、相性のいい男女を表す。「吾妻男あづまおとこに京女みやこめ薦いせせん」に用いられている吾妻と京は共に地名のカテゴリに属し、「尾張男おわりおとこに伊勢女いせをんな」も同様である。「面砲男おもひおとこに面瘡女房おもひさによは」は顔にできるもののカテゴリで、男性に面砲、女性の方は言葉の響きも優しい「おもくさ」を配したのであろう。「面瘡女房」だと音

数も合う。

【譬喩尽】で面砲を男性に、「おもくさ」を女性に配していることは注目される。面砲以外の、病気による吹き出物は性別を問わないが、基本的に、面砲は男性に「おもくさ」は女性にできるものとして描かれているようだ。

西鶴自身「好色一代男」では女性の「おもくさ」を描いているが、「武家伝来記」では

筑後の衆にひざ枕させて、鼻の上なるにきびをほり候を、御咎めもつとも(25)

と男性の面砲を描いており、性別によって使い分けている。

俳諧に「おもくさ」が詠まれる場合、女性をイメージさせる女郎花とともに詠まれていたことは既に見た通りである。一方、面砲は、次の「信徳十百韻」延宝二仲夏上旬の例に見られるように、基本的に男性の顔にできる物として詠まれる。

額髪ひたひがみおしむ甲斐かひなく新そり捨すてて

かほのにきびはおもひうちにか(26)

もちろん女性にも面砲はできる。「都風俗化粧伝」など女性向けの化粧関係の史料を繙くと面砲の記事は容易に見いだせる。しかし、女性の面砲はあくまでも女性向きの実用書に見られるものである。文芸の中では面砲を表す「おもくさ」は女性専用の語で、男性にできた用例は、筆者は未だ見いだし得ないのである。

ところで面皷が「おもくさ」と異なる点として、性的欲求の象徴として描かれることが挙げられる。「俳諧七百五十韻」に

腎薬たる、蟻の酒塩

信徳

思ひ内にあれば顔へ吹出る難波風

如風(27)

とある「顔へ吹出る」ものは、腎虚が治癒して精力が回復した結果できた面皷だと考えられる。

同様に「俳諧雑巾」の常矩の句に

朝顔の扱も面皷ニキレはあるものを

後家が垣根の焔をかなしむ(28)

とあるのは、空閨をかこつ女性の例である。なお、このような句でも女性の顔そのものに面皷はできない。

このような、性欲、引いては強い生命力をイメージさせる面皷の表現は多く見られ、芥川龍之介「羅生門」などにも繋がっていくと考えられるが、ここではその指摘に留めておく。

「面皷と「おもくさ」を性別で使い分けているのは、女性を描写する際に、こういった生々しいイメージを避けるという意識が働いているのではないかと考えられる。「おもくさ」という、女郎花と結びつき、どこか雅な響きの語は、もっぱら女性を描写するために用いられたのである。(29)

「にぎび」と「そばかす」

先に挙げた「面皷男にきびおとこに面瘡女房おもくさにようば」と類似の言いまわしとして「面皷男に雀斑女」を掲載している書物があるように、「おもくさ」はしばしば雀斑と混同されてきた。

本稿の目的は、西鶴の作品における表現を西鶴の時代の大阪の用例に基づいて解釈することであり、「おもくさ」の語彙史ではないが、「おもくさ」が雀斑と混同された背景について、ごく簡単に記しておく。

明らかに同じものを「おもくさ」「そばかす」の両方で表現した例として、次の二冊の遊女評判記が挙げられる。一つは赤木文庫蔵の「嶋原集」、五十三人に上る遊女の容姿についてかなり辛口に記した評判記であるが、梅部の定家について、

○定家 花といは、花にたとへても。なを物よりすくれたり。さりながらすこしおもくさあり。(30)

と、美しさを損なうものとして「おもくさ」があることを指摘している。

「色道大鏡」の伝記によるとこの定家という遊女は永子という女性であるが(31)、おそらく同一人物であろう、同じ明暦元年則ち承応四年に刊行された「浪華物語」にも定家は掲載されている。そこには、

定家 太夫をり也、かつこう、塩らしく、いやしげなし、顔の蕎麦糟景すきたり、いかにしてもよはもの也。(32)

とあって、「おもくさ」ではなく「蕎麦糟」を欠点として挙げているのである。

このように「おもくさ」と「そばかす」を混同する背景には、当時の美容に関する意識や医学的知識が反映していると考えられる。面皰は化膿して経過が悪いと色素沈着を起こす。衛生状態がよくない時代には、そのようなことは現在よりもずっと多くあったと推測される。面皰による色素沈着と「そばかす」の区別が付かなかったことが、混同の原因ではないだろうか。

「おもくさ」には「面草」「顔瘡」という漢字が当てられるが、佐藤鶴吉の投稿にある「字鏡集」では「奸」という漢字が当てられている。「奸」は「オモクサ」と並立して記された「クロクサ」とは何か。あるいは「おもくさ」が炎症を起こしたあと色素沈着を起こしている「くろ」い「くさ」かと思われるが、他に用例を見ない。

この「奸」という漢字は『説文』に「面黒気也」と説明されている。いうまでもなく当時の医学ではその指す範囲は非常に広がったであろう。

『医心方』二十一には「治婦人面上黒奸方第二」(33)と女性の顔にできる「黒奸」について記載がある。ここでいう「黒奸」は「婦人」にできることから、思春期に多くなる雀斑とは考えにくく、現代医学でいう肝斑に当たると推測されるが、具体的に何なのかは不明である。

蘆川桂洲の『病名彙解』には「奸黧」という項目がある。

奸黧 雀斑ノコトナリ、俗ニソバカスト云リ、奸ハ字書ニ面ノ黒気ナリ、奸別ニ野又奸ニ作ルハ共ニ非ナリト云リ(34)

ここでいう「字書」は先に見た『説文』に基づくものだが、「奸黧」を雀斑つまり「ソバカス」としている。

念のために記しておくが、「奸」が「オモクサ」で「奸黧」が「ソバカス」であるから「オモクサ」が「ソバカス」であるということにはならない。「奸」は「ソバカス」そのものではなく「面ノ黒気」、つまり顔の色素沈着すべての集合だからである。

これらから推測できるのは、古代から近世に至るまでは、面皰が炎症を起こしてできた色素沈着も、雀斑も、日焼けによるシミも、肝斑も、あらゆる顔の黒ずみが、現代ほど区別されていなかったということである。

近世においても、例えば『都風俗化粧伝』を繙くと、「面上に生ずる粉刺を治する薬の伝」「雀斑を治す薬の伝」(巻巻顔面之部)と、面皰と雀斑にそれぞれ別の治療法が記されている(35)。しかし『都風俗化粧伝』は化粧に熱心な層に向けた一種の美容専門書で、例えば山東京伝の「十三味薬あらひこ」の広告に

此所ちよつと口上江戸京ばし京でんみせ

十三味薬あらひこ一袋百三十二せん、第一いろを白くしきめをこまかにする事うけ合也。にきび、そばかす、いぼ、ほくろ、あざ、かほのしみたびくあらへばおつる事妙なり(36)

と記されているように、一般には顔にできるものはすべて同じように扱われていたようである。

現在とは大きく異なるこういった状況の下で、本来吹き出物、小さな面の皷を表す「おもくさ」が、しばしば雀卵斑と混同されたのは無理もないことである。雀卵斑が女性に多いこと、音数が同じで語呂合わせが破綻しないのも、「おもくさ」と「そばかす」が入れ替わりやすかつた理由であろう。

面皷を適切に治療しない時代は長く続いた。昭和三十六年に「上を向いて歩こう」をリリースした歌手、坂本九は面皷跡がかえって人懐っこいと受け取られていた。この感覚は三田村鳶魚の「おもくさしげく」はじやんこ面づらでせう。」という発言に通じる。資生堂が初めて面皷用の化粧水「アクネローション」を売り出したのは昭和十二年のことであり、面皷治療薬クレアラシルの輸入販売開始は昭和二十二年、「思ひオモクサ思はれニキビ」に由来するであろう「思ひ思われ振り振られ」のフレーズのCMがヒットしたのは昭和六十一年のことである。

昭和二年、「西鶴対問」における藤井の「そばかすの事で、「思ひオモクサ思はれニキビ」といふ諺あり。」という唐突な論理の飛躍も、にきびとそばかすのはっきりした区別ができていなかったと考えると納得がいく。そもそも佐藤鶴吉は、「それも、あまり大きく濃いのが、沢山では美人らしくもあるまいが」と述べているが、雀卵斑は数ミリ以下で、濃くなることはあつても大きくはなることはない。ここでも雀卵斑とその他のシミなどが混同されているのである。昭和二年の段階では、女性を悩ませる肌のトラブルについて詳しい一般男性はほとんどいなかつただろう。

まとめ

以上見てきたように、「そばかす」と混同されることもあつたが、「おもくさ」とは元来、粟のように小さい面皷、つまり吹き出物を指す語であつた。「好色一代男」の

小づくりなる女。年の比は片手を。四度計かぞふるころをひ、目のうちすゞしく。おもくさ、しげく見えて。どこともなふ、このもし。

は、この女性の年齢と、完璧な美しさでない分、かえって親しみやすさを感じさせるという印象を表しているのである。

「おもくさ」は辞書にも吹き出物であることが明瞭に記されており、漢字表記や俳諧・狂歌の用例からも吹き出物であることが読み取れる。おみなえしと縁語になることも「おもくさ」の吹き出物である形状を裏付けるものであり、諺からも通常の面皷と対になる小さな面の皷、吹き出物であることがわかる。

特に、西鶴と同じ時代と同じ大坂の人である生白堂行風の編んだ『古今夷曲集』に収められている入安の狂歌、

秋の野に露おもくさの女郎花色はにきびか粟のむせるか

は、「おもくさ」が粟状の小さな「にきび」、つまり吹き出物であることをはっきりと示すものである。

我々はテキストを読むに当たって、自身の語感に頼ることなく、作者の生きた時代の用例を解釈の根拠にしなければならぬ。『好色一代男』のように研究が盛んに行われ、数多くの注釈が出版されているテキストであっても、改めて西鶴の時代の大阪の用例を丹念に当たる必要がある。本稿もまだまだ丹念な読みには達していないであろうが、「おもくさ」が「そばかす」ではなく吹き出物であることは明らかにできたと思う。

以上、『好色一代男』の「おもくさ」については、当時の大阪の用例から、「そばかす」ではなく小さめの「にきび」、則ち吹き出物であると結論する。

注

- (1) 井原西鶴作・横山重校訂『好色一代男』、岩波文庫、一九五五年。
 (2) 福田安典『好色一代男』「おもくさ」考―忍頂寺務の指摘をてがかりに―、『上方文藝研究』第二号、二〇一四年。
 (3) 三田村蕨魚編『西鶴輪講第四巻好色一代男』春陽堂、一九二七年。
 (4) 『面草』眉毛よりは寧ろモミアゲと解せられ候。「しげく好もし」の言葉もあり、好もしきはモミアゲの濃き女にて、井田亀学の「相学弁察」には、「婦人の生え下り濃きは、□面草の如し、奸淫にして私に嫁す」と記載有之候。『独寝』にも何かモミアゲ論ありし様存居候。」とある。
 (5) 前田金五郎『好色一代男全注釈』上巻、日本古典評釈・全注釈叢書、角川書店、一九八〇年。
 (6) 『西鶴対問』、『髻屋江戸生活研究』第二年第十一号十一月号、一九二七年。
 (7) (6) に同じ。

- (8) 『西鶴対問』、『髻屋江戸生活研究』第二年第十二号十二月号、一九二七年。
 (9) 田山方南校閲・北野克写『名語記』勉誠出版、一九八三年。
 (10) 明治学院大学図書館デジタルアーカイブス『和英語林集成』による。

ここで念のため『和英語林集成』の漢字表記に触れておく。「面瘡」の「瘡」という漢字は金瘡・刀瘡などというときは切り傷を表すが、そうでない場合は「雑字類編」(文化七年序)にも「瘡」(ヤキウ)、「腫」(コトカサ)、「細瘡」(コトカサ)、「雑字類編影印・研究」杉本つとむ監修 薬科勝之著 ひとく書房(一九八二)とあるように、吹き出物を表す。また『雑字類編』には「香瘡」と吹き出物を表す「瘡」の字を「クサ」にも用いている。よって、omokusa は英文の説明だけでなく、「面瘡」という表記からも吹き出物だということは明らかである。

- (11) 校注・沢田田武『新編日本古典文学全集83近世説美少年録(1)』小学館、一九九九年。
 (12) 『古典俳文学大系4談林俳諧集(二)』、集英社、一九七二年。
 (13) 明暦二年(5)による。
 (14) 『古典俳文学大系2貞門俳諧集(二)』、集英社、一九七一年。
 (15) 『古典俳文学大系3談林俳諧集(一)』、集英社、一九七一年。
 (16) 長友千代治『女重宝記・男重宝記―元禄若者心得集』現代教養文庫、社会思想社、一九九三年。
 (17) (12) に同じ。
 (18) 『新日本古典文学大系61七十一番職人歌合新撰狂歌集古今夷曲集』岩波書店、一九九三年。
 (19) (18) に同じ。
 (20) (18) に同じ。
 (21) 長友千代治『重宝記資料集成第一九巻俗信・年曆四』、臨川書店、二〇〇〇

八年。

- (22) 中野吉平『俚語大辞典』、国書刊行会、一九三三年。
- (23) 野口七之輔『故事ことわざ辞典』、再建社、一九六四年。
- (24) 松葉軒東井編・宗政五十緒校「たとへづくし」警噓尽』、同朋社、一九七九年。
- (25) 谷脇理史「富士昭雄 井上敏幸」『新日本古典文学大系77 武道伝来記西鶴置土産万の文反古西鶴名残の友』、岩波書店、一九八九年。
- (26) (15) に同じ。
- (27) 『日本俳書大系7 談林俳諧集』、日本俳書大系刊行会（春秋社）、一九二六年。
- (28) (27) に同じ。
- (29) 「おもくさ」とよく似た歌語に「おもひくさ」がある。「おもひくさ」が具体的に何を指すのかは、ナンバンギセルの他にススキ、シオンなど諸説あるが、オミナエシもその一つであり、『蔵玉和歌集』に「女郎花を思草といふ事は、齋院せむさい草尽に見えたり。(略) 但、女郎花を思草と云事は、彼前裁合に定らるる条、勿論なり」と記されている。「好色一代男」の「おもくさ」の描写部分にこのような歌学書が影響しているとは考え難いが、吹き出物や症状の軽いにきびを「おもくさ」と表現する際、「面」と「思い」の掛詞から「おもひくさ」に通じる雅なニュアンスが与えられている可能性は考えられよう。「おもくさ」の語源は「おもて」にできる「くさ」であると推測できるが、「面」は露が重い(おもい)、恋する思い(おもい)という掛詞を容易に連想させる。
- (30) 小野晋『近世文藝資料9 近世初期遊女評判記集 本文編』古典文庫、一九六五年。
- (31) 小野晋『近世文藝資料9 近世初期遊女評判記集 研究編』古典文庫、一九六五年による。
- (32) (30) に同じ。

(33) 丹波康頼撰 横佐知子全訳『精解医心方』、筑摩書房、一九九三年〜二〇一二年。

(34) 『近世漢方医学書集成64 蘆川桂洲』、名著出版、一九八二年。

(35) 『江戸時代女性文庫64 万世珍宝女日用大全 都風俗化粧伝』、大空社、一九九七年。なお、肌のトラブルとスキンケアに関しては、『化粧史文献資料年表(化粧文化シリーズ)』(ポーラ文化研究所、増補改訂版、二〇〇一年)とそれに基づく関連書籍、各化粧品会社の公式サイトを適宜参照した。

(36) 『教訓乳母草子』四編上巻。柳秀子・小粥祐子・平井聖「翻刻 山東京山作『教訓乳母草紙』」、『學苑』、昭和女子大学近代文化研究所、二〇〇六年八月による。

本稿は二〇一四年八月四日に行われた『上方文藝研究』第十一号合評会でのやりとりから生まれたものです。合評会の出席者の皆さまにお礼申し上げます。

(にいな のりこ) 佛敎大学非常勤講師